

2022年主要文献目録

(2022年刊行の文献を掲載対象としている)

* 国際法、国際私法の雑誌名は原則として法律編集者懇話会のものを使用した。略語表は『法律関係8学会共通会員名簿』又は『法律時報』94巻13号(2022年12月)を参照。

国際政治・外交史

著書

【一般】

| | | |
|--------------------------------------|--|--------------|
| 青井 千由紀 | 戦略的コミュニケーションと国際政治—新しい安全保障政策の論理 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 明石 純一(編著) | 移住労働とディアスポラ政策—国境を越える人の移動をめぐる送出国のパースペクティブ | 筑波大学出版会 |
| 池内 恵、宇山 智彦、川島 真、小泉 悠、鈴木 一人、鶴岡 路人、森 聡 | ウクライナ戦争と世界のゆくえ | 東京大学出版会 |
| 岩崎 正洋(編) | ポスト・グローバル化と政治のゆくえ | ナカニシヤ出版 |
| ウォーラー・ステイン(著)、川北 稔(訳) | 史的システムとしての資本主義 | 岩波書店 |
| 内海 成治、桑名 恵、大西 健丞(編) | 緊急人道支援の世紀—紛争・災害・危機への新たな対応 | ナカニシヤ出版 |
| アルトゥーロ・エスコバル(著)、北野 収(訳) | 開発との遭遇—第三世界の発明と解体 | 新評論 |
| 岡田 章 | ゲーム理論の見方・考え方 | 勁草書房 |
| エリノア・オストロム(著)、原田 禎夫、齋藤 暖生、嶋田 大作(訳) | コモンズのガバナンス—人びとの協働と制度の進化 | 晃洋書房 |
| E. H. カー(著)、近藤 和彦(訳) | 歴史とは何か | 岩波書店 |
| 風間 孝、今野 泰三(編著) | 教養としてのジェンダーと平和 | 法律文化社 |
| 川名 晋史(編) | 世界の基地問題と沖繩 | 明石書店 |
| 北村 暁夫、中嶋 毅(編著) | 近現代ヨーロッパの歴史—人の移動から見る | 放送大学教育振興会 |
| ロバート・ギルピン(著)、徳川 家広(訳) | 覇権国の交代—戦争と変動の国際政治学 | 勁草書房 |
| 葛谷 彩、小川 浩之、春名 展生(編著) | 国際関係の系譜学—外交思想理論 | 晃洋書房 |
| マーチン・ファン・クレフェルト(著)、石津 朋之(監訳) | 補給戦—ヴァレンシュタインからパットンまでのロジスティクスの歴史 | 中央公論新社 |
| 小泉 康一 | 彷徨するグローバル難民政策—「人道主義」の政治と倫理 | 日本評論社 |
| 小泉 悠 | ウクライナ戦争の200日 | 文藝春秋 |
| 小泉 悠 | ウクライナ戦争 | 筑摩書房 |
| クリストファー・コーカー(著)、奥山 真司(訳) | 戦争はなくせるか? | 勁草書房 |
| 小西 雅子 | 気候変動政策をメディア議題に—国際NGOによる広報の戦略 | ミネルヴァ書房 |
| 小林 義久 | 国連安保理とウクライナ侵攻 | 筑摩書房 |
| 小原 雅博 | 戦争と平和の国際政治 | 筑摩書房 |
| 齋藤 達志 | 撤退戦—戦史に学ぶ決断の時機と方策 | 中央公論新社 |
| 佐藤 史郎 | 核と被爆者の国際政治学—核兵器の非人道性と安全保障のはざままで | 明石書店 |
| 佐藤 史郎、三牧 聖子、清水 耕介(編) | E・H・カーを読む | ナカニシヤ出版 |
| カール・シュミット(著)、権左 武志(訳) | 政治的なものの概念 | 岩波書店 |
| 将基面 貴巳 | 愛国の起源—パトリオティズムはなぜ保守思想となったのか | 筑摩書房 |
| 白鳥 潤一郎、高橋 和夫(編著) | 現代の国際政治 | 放送大学教育振興会 |
| 杉田 弘毅 | 国際報道を問いなおす—ウクライナ戦争とメディアの使命 | 筑摩書房 |
| ピーター・N・スターンズ(著)、上杉 忍(訳) | 人権の世界史(ミネルヴァ世界史「翻訳」ライブラリー 2) | ミネルヴァ書房 |
| ラリー・ダイヤモンド(著)、市原 麻衣子(監訳) | 侵食される民主主義—内部からの崩壊と専制国家の攻撃 上・下 | 勁草書房 |
| 竹沢 泰子、ジャン・フレデリック・ショブ(編) | 人種主義と反人種主義—越境と転換 | 京都大学学術出版会 |

| | | |
|---|--|--------------|
| 竹田 志郎 | グローバル化の進展と市場開発—多国籍企業の競争と「協調」 | 文眞堂 |
| マイケル・S・Y・チェ(著), 安田 雪(訳) | 儀式をゲーム理論で考える—協調問題、共通知識とは | みすず書房 |
| 筒井 清輝 | 人権と国家—理念の力と国際政治の現実 | 岩波書店 |
| フレデリック・テイラー(著), 清水 雅大(訳) | 一九三九年誰も望まなかった戦争 | 白水社 |
| 出口 康夫、大庭 弘継(編) | 軍事研究を哲学する—科学技術とデュアルユース | 昭和堂 |
| エマニュエル・トッド(著), 堀 茂樹(訳) | 民主主義の野蛮な起源 | 文藝春秋 |
| 外村 大(編) | 和解をめぐる市民運動の取り組み—その意義と課題 | 明石書店 |
| マーク・トラクテンバーグ(著), 村田 晃嗣、中谷 直司、山口 航(訳) | 国際関係史の技法—歴史研究の組み立て方 | ミネルヴァ書房 |
| マイケル・S・ナイバーク(著), 稲野 強(訳) | 戦争の世界史(ミネルヴァ世界史「翻訳」ライブラリー 1) | ミネルヴァ書房 |
| 中尾 知代 | 戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー—第二次大戦連合軍元捕虜とその家族 | 日本評論社 |
| 永原 陽子、吉澤 誠一郎(責任編集) | 二つの大戦と帝国主義—二〇世紀前半(岩波講座世界歴史 20) | 岩波書店 |
| 西嶋 美智子 | 自衛権の系譜—戦間期の多様化と軌跡 | 信山社 |
| 西脇 修 | 米中対立下における国際通商秩序—パワーバランスの急速な変化と国際秩序の再構築 | 文眞堂 |
| 野田 正彰 | 戦争と罪責 | 岩波書店 |
| 早瀬 晋三 | すれ違う歴史認識—戦争で歪められた歴史を糺す試み | 人文書院 |
| 半澤 朝彦(編著) | 政治と音楽—国際関係を動かす“ソフトパワー” | 晃洋書房 |
| リチャード・ヒークス(著), ICT4D Lab(訳) | デジタル技術と国際開発 | 日本評論社 |
| 平野 千果子 | 人種主義の歴史 | 岩波書店 |
| フランシス・フクヤマ(著), マチルデ・ファスティング(編), 山田 文(訳) | 「歴史の終わり」の後で | 中央公論新社 |
| 藤原 帰一、竹中 千春、ナジア・フサイン、華井 和代(編著) | 気候変動は社会を不安定化させるか—水資源をめぐる国際政治の力学 | 日本評論社 |
| 船橋 洋一 | 国民安全保障国家論—世界は自ら助くる者を助く | 文藝春秋 |
| イアン・ブレマー(著), ユーラシア・グループ日本、新田 享子(訳) | 危機の地政学—感染爆発、気候変動、テクノロジーの脅威 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 穆 堯芊、新井 洋史(編著) | 大国のなかの地域経済—アメリカ・中国・日本・EU・ロシア | 日本評論社 |
| 益田 実、齋藤 嘉臣、三宅 康之(編著) | デタントから新冷戦へ—グローバル化する世界と揺らぐ国際秩序 | 法律文化社 |
| 増田 雅之(編著) | ウクライナ戦争の衝撃 | インターブックス |
| ヤン=ヴェルナー・ミュラー(著), 山岡 由美(訳) | 民主主義のルールと精神—それはいかにして生き返るのか | みすず書房 |
| 村上 直久 | NATO冷戦からウクライナ戦争まで | 平凡社 |
| 百瀬 宏 | 小国—歴史にみる理念と現実 | 岩波書店 |
| 森 聡、福田 円(編著) | 入門講義戦後国際政治史 | 慶應義塾大学出版会 |
| 森口(土屋) 由香、川島 真、小林 聡明(編) | 文化冷戦と知の展開—アメリカの戦略・東アジアの論理 | 京都大学学術出版会 |
| 山崎 望(編) | 民主主義に未来はあるのか? | 法政大学出版局 |
| 山下 光 | 国際平和協力 | 創元社 |
| 山田 祥子 | グローバルな正義と民主主義: 実践に基づいた正義論の構想 | 勁草書房 |
| 横井 勝彦 | 国際武器移転の社会経済史 | 日本経済評論社 |
| 吉田 文彦 | 迫りくる核リスク—「核抑止」を解体する | 岩波書店 |
| ギデオン・ラックマン(著), 村井 浩紀(監訳) | 強権的指導者の時代—民主主義を脅かす世界の新潮流 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福岡 良明(編) | 総力戦・帝国崩壊・占領(シリーズ戦争と社会 3) | 岩波書店 |
| 劉 傑(編) | 和解のための新たな歴史学—方法と構想 | 明石書店 |
| J.L.アプー・ルゴド(著), 佐藤 次高、斯波 義信、高山 博、三浦 徹(訳) | ヨーロッパ覇権以前—もうひとつの世界システム上・下 | 岩波書店 |

| | | |
|--|-----------------------------|----------|
| ジョン・ローレンズ(著), 中山 竜一(訳) | 万民の法 | 岩波書店 |
| アンドリュー・J・ロッター(著), 川口 悠子、繁沢 敦子、藤田 怜史(訳) | 原爆の世界史—開発前夜から核兵器の拡散まで | ミネルヴァ書房 |
| サラ・ロレンツィーニ(著), 三須 拓也、山本 健(訳) | グローバル開発史—もう一つの冷戦 | 名古屋大学出版会 |
| 渡邊 容一郎 | 西洋政治史 | 晃洋書房 |
| S.ワッサーマン、K.ファウスト(著), 平松 闊、宮垣 元(訳) | 社会ネットワーク分析—「つながり」を研究する方法と応用 | ミネルヴァ書房 |

【日本関係】

| | | |
|---|--|--------------|
| 安達 宏昭 | 大東亜共栄圏—帝国日本のアジア支配構想 | 中央公論新社 |
| 池上 萬奈 | エネルギー資源と日本外交—化石燃料政策の変容を通して1945年～2021年 | 芙蓉書房出版 |
| 伊東 かおり | 議員外交の世紀—列国議会同盟と近現代日本 | 吉田書店 |
| 宇田川 幸大 | 東京裁判研究—何が裁かれ、何が遺されたのか | 岩波書店 |
| 王 広濤 | 日中歴史和解の政治学—「寛容」と「記憶」をめぐる戦後史 | 明石書店 |
| 岡部 芳彦 | 日本・ウクライナ交流史—1937-1953年 | 神戸学院大学出版会 |
| 片田 さおり(著), 三浦 秀之(訳) | 日本の地経学戦略—アジア太平洋の新たな政治経済力学 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 川島 真、岩谷 將(編) | 日中戦争研究の現在—歴史と歴史認識問題 | 東京大学出版会 |
| 川島 真、細谷 雄一(編) | サンフランシスコ講和と東アジア | 東京大学出版会 |
| 姜 昌一 | 近代日本の朝鮮侵略と大アジア主義—右翼浪人の行動と思想 | 明石書店 |
| 貴志 俊彦 | 帝国日本のプロパガンダ—「戦争熱」を煽った宣伝と報道 | 中央公論新社 |
| 木村 福成、西脇 修(編著) | 国際通商秩序の地殻変動—米中対立・WTO・地域統合と日本 | 勁草書房 |
| 鞠 重鎬(編著) | 日韓関係のあるべき姿—垂直関係から水平関係へ | 明石書店 |
| マイケル・D・ゴードン、G・ジョン・アイケンベリー(著), 藤原 帰一、向 和歌奈(監訳) | 国際共同研究ヒロシマの時代—原爆投下が変わった世界 | 岩波書店 |
| 国立社会保障・人口問題研究所(編) | 国際労働移動ネットワークの中の日本—誰が日本を目指すのか(国立社会保障・人口問題研究所研究叢書) | 日本評論社 |
| 小谷 賢 | 日本インテリジェンス史—旧日本軍から公安、内調、NSCまで | 中央公論新社 |
| サラ・コブナー(著), 白川 貴子(訳) | 帝国の虜囚—日本軍捕虜収容所の現実 | みすず書房 |
| 坂元 一哉 | 「戦後」が終わるとき—日本は外交の言葉を取りもどせるか | 中央公論新社 |
| 佐々木 雄一 | 近代日本外交史—幕末の開国から太平洋戦争まで | 中央公論新社 |
| 佐野 利男 | 核兵器禁止条約は日本を守るか—「新しい現実」への正念場 | 信山社 |
| 城山 英巳 | 天安門ファイル—極秘記録から読み解く日本外交の「失敗」 | 中央公論新社 |
| 神余 隆博、松村 五郎 | ウクライナ戦争の教訓と日本の安全保障 | 東信堂 |
| 滝波 宏文 | 日米金融危機の政治経済学—平成金融危機&リーマン・ショック7つの教訓 | 中央経済社 |
| 池 炫周 直美、エドワード・ポイル(編著) | 日本の境界—国家と人びとの相克 | 北海道大学出版会 |
| 千々和 泰明 | 戦後日本の安全保障—日米同盟、憲法9条からNSCまで | 中央公論新社 |
| 長 史隆 | 「地球社会」時代の日米関係—「友好的競争」から「同盟」へ1970-1980年 | 有志舎 |
| 手塚 和彰 | 日独伊三国同盟の虚構—幻の軍事経済同盟 | 彩流社 |
| 土井 智義 | 米国の沖繩統治と「外国人」管理—強制送還の系譜 | 法政大学出版局 |
| 富田 武 | 日ソ戦争南樺太・千島の攻防—領土問題の起源を考える | みすず書房 |
| 中戸 祐夫、崔 正勲(編著) | 北朝鮮研究の新地平—理論的地域研究の模索 | 晃洋書房 |
| 日本国際フォーラム(編) | ユーラシア・ダイナミズムと日本 | 中央公論新社 |
| 波多野 澄雄 | 日本の歴史問題—「帝国」の清算から靖国、慰安婦問題まで | 中央公論新社 |
| 波多野 澄雄(編著) | 国家間和解の揺らぎと深化—講和体制から深い和解へ | 明石書店 |
| 馬場 錬成 | 沖縄返還と密使・密約外交—宰相佐藤栄作、最後の一年 | 日本評論社 |
| 布施 祐仁 | 日米同盟・最後のリスク—なぜ米軍のミサイルが日本に配備されるのか | 創元社 |

| | | |
|----------------|---------------------------------|----------|
| 前田 廉孝 | 塩と帝国—近代日本の市場・専売・植民地 | 名古屋大学出版会 |
| 松田 武 | 自発的隷従の日米関係史—日米安保と戦後 | 岩波書店 |
| 宮島 喬 | 「移民国家」としての日本—共生への展望 | 岩波書店 |
| 森本 敏、小原 凡司(編著) | 台湾有事のシナリオ—日本の安全保障を検証する | ミネルヴァ書房 |
| 山崎 雅弘 | 太平洋戦争秘史—周辺国・植民地から見た「日本の戦争」 | 朝日新聞出版 |
| 山本 章子、宮城 裕也 | 日米地位協定の現場を行く—「基地のある街」の現実 | 岩波書店 |
| 湯川 勇人 | 外務省と日本外交の1930年代—東アジア新秩序構想の模索と挫折 | 千倉書房 |
| 劉 建輝(編著) | 「満洲」という遺産—その経験と教訓 | ミネルヴァ書房 |
| 和田 春樹 | 日朝交渉30年史 | 筑摩書房 |

【アジア・中東・ロシア・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニア関係】

| | | |
|--------------------------|---------------------------------------|--------------|
| 青木 健太 | タリバン台頭—混迷のアフガニスタン現代史 | 岩波書店 |
| 青山 弘之 | ロシアとシリア—ウクライナ侵攻の論理 | 岩波書店 |
| 飯山 陽 | 中東問題再考 | 扶桑社 |
| 石井 明、朱 建榮(編著) | 東アジア国境紛争の歴史と論理 | 藤原書店 |
| 石田 耕一郎 | 台湾がめざす民主主義—強権中国への対立軸 | 大月書店 |
| 石山 永一郎 | ドゥテルテ—強権大統領はいかに国を変えたか | 角川新書 |
| 市川 浩 | ソ連核開発全史 | 筑摩書房 |
| 井上 達夫 | ウクライナ戦争と向き合う—プーチンという「悪夢」の実相と教訓 | 信山社 |
| 今井 宏平(編) | クルド問題—非国家主体の可能性と限界 | 岩波書店 |
| 今井 宏平(編著) | 教養としての中東政治 | ミネルヴァ書房 |
| クレイグ・ウィットロック(著)、河野 純治(訳) | アフガニスタン・ペーパーズ—隠蔽された真実、欺かれた勝利 | 岩波書店 |
| SGCIME(編) | アジア経済の現状とグローバル資本主義 | 御茶の水書房 |
| 遠藤 貢、阪本 拓人(編) | ようこそアフリカ世界へ | 昭和堂 |
| 岡田 進 | 「ソ連社会主義」からロシア資本主義へ—ロシア社会と経済の100年 | 東信堂 |
| 岡野 英之 | 西アフリカ・エボラ危機2013-2016—最貧国シエラレオネの経験 | ナカニシヤ出版 |
| 岡本 隆司 | 明代とは何か—「危機」の世界史と東アジア | 名古屋大学出版会 |
| 岡本 隆司 | 曾國藩—「英雄」と中国史 | 岩波書店 |
| 落合 雄彦(編著) | アフリカ潜在力のカレイドスコープ(龍谷大学社会科学研究所叢書 第136巻) | 晃洋書房 |
| 粕谷 祐子(編著) | アジアの脱植民地化と体制変動—民主制と独裁の歴史的起源 | 白水社 |
| 我部 政明、豊田 祐基子 | 東アジアの米軍再編—在韓米軍の戦後史 | 吉川弘文館 |
| 川島 真(編) | ようこそ中華世界へ | 昭和堂 |
| 川島 真、小嶋 華津子(編) | 習近平の中国 | 東京大学出版会 |
| 川島 真、21世紀政策研究所(編著) | 習近平政権の国内統治と世界戦略：コロナ禍で立ち現れた中国を見る | 勁草書房 |
| 川中 豪 | 競争と秩序—東南アジアにみる民主主義のジレンマ | 白水社 |
| 木下 恵二 | 近代中国の新疆統治—多民族統合の再編と帝国の遺産 | 慶應義塾大学出版会 |
| ブレンドン・J・キャンノン、墓田 桂(編著) | インド太平洋戦略—大國間競争の地政学 | 中央公論新社 |
| 熊倉 潤 | 新疆ウイグル自治区—中国共産党支配の70年 | 中央公論新社 |
| 齊藤 貢 | イランは脅威か—ホルムズ海峡の大国と日本外交 | 岩波書店 |
| 坂本 勉 | トルコ民族の世界史 | 慶應義塾大学出版会 |
| 佐藤 公彦 | 駐米大使胡適の「真珠湾への道」—その抗日戦争と対米外交 | 御茶の水書房 |
| シルヴァン・シペル(著)、林 昌宏(訳) | イスラエルvs.ユダヤ人—中東版「アパルトヘイト」とハイテク軍事産業 | 明石書店 |
| 下斗米 伸夫 | プーチン戦争の論理 | 集英社インターナショナル |
| S・ジャイシャンカル(著)、笠井 亮平(訳) | インド外交の流儀—先行き不透明な世界に向けた戦略 | 白水社 |
| 庄司 智孝 | 南シナ海問題の構図—中越紛争から多国間対立へ | 名古屋大学出版会 |
| 泉水 英計(編著) | 近代国家と植民地性—アジア太平洋地域の歴史的展開 | 御茶の水書房 |

| | | |
|-------------------------------|---|--|
| 園田 茂人(編) | はじめて出会う中国 | 有斐閣 |
| 竹中 治堅(編著) | 「強国」中国と対峙するインド太平洋諸国 | 千倉書房 |
| 趙 景達(責任編集) | 一五年戦争から解放へ—一九三〇年代から解放・分断まで(原典朝鮮近代思想史 6) | 岩波書店 |
| 張 博樹(著), 中村 達雄、及川 淳子(訳) | 紅い帝国の論理—新全体主義に隠されたもの | 白水社 |
| 中澤 克二 | 極権・習近平—中国全盛30年の終わり | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 中戸 祐夫、森 類臣(編著) | 北朝鮮の対外関係—多角的な視点とその接近方法 | 晃洋書房 |
| 中西 嘉宏 | ミャンマー現代史 | 岩波書店 |
| 野嶋 剛 | 新中国論—台湾・香港と習近平体制 | 平凡社 |
| 深沢 淳一 | 「不完全国家」ミャンマーの真実—民主化10年からクーデター後までの全記録 | 文眞堂 |
| キャサリン・ベルトン(著), 藤井 清美(訳) | プーチン—ロシアを乗っ取ったKGBたち 上・下 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 堀井 優 | 近世東地中海の形成—マムルーク朝・オスマン帝国とヴェネツィア人 | 名古屋大学出版会 |
| 舛方 周一郎 | つながりと選択の環境政治学—「グローバル・ガバナンス」の時代におけるブラジル気候変動政策 | 晃洋書房 |
| 松田 素二、フランシス・B・ニヤムンジョ、太田 至(編著) | アフリカ潜在力が世界を変える—オルタナティブな地球社会のために | 京都大学学術出版会 |
| 松本 弘(編) | 中東・イスラーム諸国政治変動ハンドブック | 人間文化研究機構地域研究推進事業「現代中東地域研究」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点 |
| ラナ・ミッター(著), 濱野 大道(訳) | 中国の「よい戦争」—甦る抗日戦争の記憶と新たなナショナリズム | みすず書房 |
| 宮田 律 | イスラムがヨーロッパ世界を創造した—歴史に探る「共存の道」 | 光文社 |
| ローリー・メドカーフ | インド太平洋戦略の地政学—中国はなぜ覇権をとれないのか | 芙蓉書房出版 |
| 山下 英愛 | ナショナリズムの狭間から—「慰安婦」問題とフェミニズムの課題 | 岩波書店 |
| 山本 栄二 | 北朝鮮外交回顧録 | 筑摩書房 |
| 吉野 誠(責任編集) | 民族の解放と社会変革 —一九二〇年代(原典朝鮮近代思想史 5) | 岩波書店 |
| マurlレーヌ・ラリュエル(著), 浜 由樹子(訳) | ファシズムとロシア | 東京堂出版 |
| 李 眞恵 | 二つのアジアを生きる—現代カザフスタンにおける民族問題と高麗人(コリョ・サラム)ディアスポラの文化変容 | ナカニシヤ出版 |
| シナン・レヴェント | 石油とナショナリズム—中東資源外交と「戦後アジア主義」 | 人文書院 |
| 渡邊 駿 | 現代アラブ君主制の支配ネットワークと資源分配—非産油国ヨルダンの模索 | ナカニシヤ出版 |

【アメリカ・ヨーロッパ関係】

| | | |
|-----------------------------|---|----------|
| ダグラス・A・アーウィン(著), 長谷川 聡哲(監訳) | 米通商政策史 | 文眞堂 |
| 青山 直篤 | デモクラシーの現在地—アメリカの断層から | みすず書房 |
| アマタフ・アチャリア(著), 芦澤 久仁子(訳) | アメリカ世界秩序の終焉—マルチプレックス世界のはじまり | ミネルヴァ書房 |
| 板橋 拓己 | 分断の克服: 1989-1990—統一をめぐる西ドイツ外交の挑戦 | 中央公論新社 |
| 伊藤 潤(編著) | 米国の国内危機管理システム—NIMSの全容と解説 | 芙蓉書房出版 |
| 井上 巽 | スターリング・ブロックの形成と展開(金融と帝国 2) | 名古屋大学出版会 |
| 妹尾 哲志 | 冷戦変容期の独米関係と西ドイツ外交 | 晃洋書房 |
| 岩井 淳、道重 一郎(編) | 複合国家イギリスの地域と紐帯 | ミネルヴァ書房 |
| 牛島 万 | 米墨戦争とメキシコの開戦決定過程—アメリカ膨張主義とメキシコ軍閥間抗争 | 彩流社 |
| 大嶋 えり子 | 旧植民地を記憶する—フランス政府による「アルジェリアの記憶」の承認をめぐる政治 | 吉田書店 |
| 岡部 みどり(編著) | 世界変動と脱EU/超EU—ポスト・コロナ、米中覇権競争下の国際関係 | 日本経済評論社 |
| 兼子 歩、貴堂 嘉之(編著) | 「ヘイト」に抗するアメリカ史—マジョリティを問い直す | 彩流社 |
| 川越 修 | アンゲラ・メルケルの東ドイツ—「劣化する社会」を生きる人びと | ナカニシヤ出版 |
| 紀平 英作 | 奴隷制廃止のアメリカ史 | 岩波書店 |
| 久保 文明、岡山 裕 | アメリカ政治史講義 | 東京大学出版会 |

| | | |
|---|---|-----------|
| 齋藤 千紘、小島 秀亮 | 欧州評議会入門―「人権の守護者」 | 信山社 |
| 佐橋 亮、鈴木 一人(編) | バイデンのアメリカ―その世界観と外交 | 東京大学出版会 |
| マーティン・J・シャーウィン(著)、三浦 元博(訳) | キューバ・ミサイル危機―広島・長崎から核戦争の瀬戸際へ1945-62 上・下 | 白水社 |
| ダニエル・シュネーデルマン(著)、吉田 恒雄(訳) | ヒトラーと海外メディア―独裁成立期の駐在記者たち | 白水社 |
| マーシ・ショア(著)、池田 年穂(訳) | ウクライナの夜―革命と侵攻の現代史 | 慶應義塾大学出版会 |
| 鍾 欣宏 | 戦後米国の対台湾関係の起源―「台湾地位未定論」の形成と変容 | 明石書店 |
| エマニュエル・トッド(著)、堀 茂樹(訳) | アングロサクソンがなぜ覇権を握ったか | 文藝春秋 |
| 富田 晃正 | いまアメリカの通商政策に何が起きているのか?―反グローバル・アクターとしての労働組合の躍進 | ミネルヴァ書房 |
| 中澤 達哉(編) | 王のいる共和政―ジャコバン再考 | 岩波書店 |
| 中本 悟、松村 博行(編著) | 米中経済摩擦の政治経済学―大国間の対立と国際秩序 | 晃洋書房 |
| 西崎 文子 | アメリカ外交史 | 東京大学出版会 |
| 橋場 弦 | 古代ギリシアの民主政 | 岩波書店 |
| 畠山 武道 | アメリカ環境政策の展開と規制改革―ニクソンからバイデンまで | 信山社 |
| エルンスト・パンツェンベック(著)、青山 孝徳(訳) | 一つのドイツの夢―カール・レンナーとオットー・バウアーにおける合邦思想と合邦政策 | 御茶の水書房 |
| アニュ・ブラッドフォード(著)、庄司 克宏(監訳) | ブリュッセル効果EUの覇権戦略―いかに世界を支配しているのか | 白水社 |
| ダイナ・レイミー・ベリー、カリ・ニコール・グロス(著)、兼子 歩、坂下 史子、土屋 和代(訳) | アメリカ黒人女性史(再解釈のアメリカ史 1) | 勁草書房 |
| 南川 文理 | アメリカ多文化社会論―「多からなる」の系譜と現在 | 法律文化社 |
| ハンス・J・モーゲンソー(著)、宮脇 昇、宮脇 史歩(訳) | 国益を守る―アメリカ外交政策の批判的検討 | 志學社 |
| 森井 裕一(編) | ヨーロッパの政治経済・入門 | 有斐閣 |
| 師井 勇一 | 戦争抵抗の倫理―大戦期アメリカの良心的戦争拒否者たち | 大月書店 |
| 山崎 雅弘 | 第二次世界大戦秘史―周辺国から解く独ソ英仏の知られざる暗闘 | 朝日新聞出版 |
| 吉野 孝、山崎 眞次(編著) | 北米移民メキシコ人のコミュニティ形成 | 東信堂 |
| ブラッド・ロバーツ(著)、村野 将(監訳) | 正しい核戦略とは何か―冷戦後アメリカの模索 | 勁草書房 |
| 渡辺 丘 | ルポアメリカの核戦力―「核なき世界」はなぜ実現しないのか | 岩波書店 |

【資料】

| | | |
|-----------------------------|----------------------------------|--------|
| アマルティア・セン(著)、東郷 えりか(訳) | インドでの経験と経済学への目覚め(アマルティア・セン回顧録 上) | 勁草書房 |
| アマルティア・セン(著)、東郷 えりか(訳) | イギリスへ、そして経済学の革新へ(アマルティア・セン回顧録 下) | 勁草書房 |
| アレン・ダレス(著)、鹿島 守之助(訳) | 諜報の技術―CIA長官回顧録 | 中央公論新社 |
| ミハイル・ゴルバチョフ(著)、副島 英樹(訳) | 我が人生―ミハイル・ゴルバチョフ自伝 | 東京堂出版 |
| 茂田 宏、小西 正樹、倉井 高志、川端 一郎(編訳) | 戦後の誕生―テヘラン・ヤルタ・ポツダム会談全議事録 | 中央公論新社 |
| ポール・サミュエル・ラインシュ(著)、田中 秀雄(訳) | 日米戦争の起点をつくった外交官 | 芙蓉書房出版 |
| ティム・ワイナー(著)、村上 和久(訳) | 米露諜報秘録1945-2020―冷戦からプーチンの謀略まで | 白水社 |

論文(国際政治・外交史)

【一般】

| | | |
|-------|------------------------------|--------------|
| 青野 利彦 | 国際政治のなかの同盟 | 国際政治206 |
| 阿部 悠貴 | 国際関係論における「規範の論争」―近年の議論に着目して― | グローバル・ガバナンス8 |

| | | |
|--|---|-----------------------------|
| 泉川 泰博 | 動態的同盟理論—分断戦略と結束戦略の相互作用と冷戦初期の米中ソ関係— | 国際政治206 |
| 一政 祐行 | 核戦争の気候影響研究の展開と今後の展望—「核の冬」論を中心に— | 安全保障戦略研究2(2) |
| 植木 俊哉 | 国連と人権:77年の歩み—その出発点と到達点 | 国連研究23 |
| 上杉 勇司 | 国連による紛争後の国家建設支援 国連平和維持活動(PKO)の過去・現在・未来 | 国際問題706 |
| 大矢根 聡 | グローバル・ガバナンス研究の展開と転回—国際的構造変化との乖離、その架橋— | グローバル・ガバナンス8 |
| 奥迫 元 | 古典的現実主義の今日的意義と可能性—建設的多元主義を求めて— | グローバル・ガバナンス8 |
| 長 有紀枝 | さらなる難民危機と国際社会 | 国際問題709 |
| 小野坂 元 | 日中戦争、第二次世界大戦中の国際労働機関、国際労働組合、キリスト教社会主義運動—連合国の戦争目的としての「生活水準の向上」を支えた国際的な連帯— | 国際関係論研究36 |
| 帯谷 俊輔 | 国際連盟期の平和維持:大戦再発防止の使命と国境紛争・内戦調停の前面化のあいだ | 国連研究23 |
| 粕谷 祐子 | 民主主義後退の時代に比較政治学ができるかもしれないこと | 法學研究95(8) |
| 嶋原 敦子、清水 奈名子 | 人新世の平和学 | 平和研究58 |
| 苅谷 千尋 | 嫉妬の国際政治学—エドモンド・パークの国際政治思想を中心に— | グローバル・ガバナンス8 |
| 川村 陶子 | 国際文化関係運営の政策を構想する—「文化外交」を超える思考枠組みと独日の実践— | 国際政治206 |
| 菅 英輝 | 冷戦の全体像と冷戦史の時期区分論 | 国際政治207 |
| 岸野 浩一 | 理性と情念の勢力均衡—デイヴィッド・ヒュームの哲学と思想によるグローバル政治経済学の再考— | グローバル・ガバナンス8 |
| 鬼頭 宏 | 短期の人口動態変化はどのような転換を迫るのか? | 国際問題708 |
| 久保田 雅則 | 核不拡散規範の制度化—制度形成と変容の要因としての逸脱行為に着目して— | 国際政治205 |
| 佐藤 安信 | ビジネスと人権:「人間の安全保障」の視点から | 国連研究23 |
| 佐藤 丙午 | エコノミック・ステイトクラフト(Economic Statecraft)の理論と現実 | 国際政治205 |
| 篠田 英朗 | 持続的な平和(Sustaining Peace)の実現に向けた取り組みの現状と課題:国際安全保障と国際平和活動の連動性の探求 | 国際安全保障50(1) |
| 篠田 英朗 | 国家建設のオーナーシップの課題と国際的な立憲主義の停滞 | 国際問題706 |
| 下谷 内奈緒 | 植民地支配の責任追及と和解 | 平和研究58 |
| 鈴木 一人 | 検証 エコノミック・ステイトクラフト | 国際政治205 |
| 大道寺 隆也 | 国際移住機関の変容と人権:国連「関連機関」化の規範的含意と実践的影響 | 国連研究23 |
| 竹峰 誠一郎 | 核兵器禁止条約がもつ可能性を拓く—世界の核被害補償制度の掘り起こしと比較調査を踏まえて | 平和研究58 |
| 土屋 礼子 | 戦前期の国際的新聞大会にみるメディアと帝国主義 | インテリジェンス22 |
| 富田 麻理 | 先住民族の参加と国際連合:先住民族権利宣言の起草と実施における影響 | 国連研究23 |
| 中谷 純江 | 国連の平和維持活動の諸改革の再考 | 国際安全保障50(1) |
| 納家 政嗣 | 「歴史の終焉」後の歴史をどう書くか? | 国際政治207 |
| 西海 洋志 | 国家建設と保護する責任の未来 主権構築(sovereignty-building)という方途? | 国際問題706 |
| 長谷川 将規 | エコノミック・ステイトクラフトの歴史と未来—メガラ禁輸からTPPまで— | 国際政治205 |
| 原田 有 | サイバー国際規範をめぐる規範起業家と規範守護者の角逐 | 安全保障戦略研究2(2) |
| 星野 俊也 | 誰がために国家は建設されるのか | 国際問題706 |
| 前川 一郎 | 「第三世界」における冷戦と脱植民地化—予備的考察 | 国際政治205 |
| 柳原 正治 | 「百巻の万国公法は数門の大砲に若かず」は今でも妥当するか? | 国際問題710 |
| 山下 光 | 国連平和活動の組織と政治 | 国際政治206 |
| Saadia M. Pekkanen, Setsuko Aoki, and John Mittleman | Small Satellites, Big Data: Uncovering the Invisible in Maritime Security | International Security47(2) |

【日本関係】

| | | |
|--------|---|--------------|
| 浅香 幸枝 | 「地球儀を俯瞰する外交政策」と中南米日系社会との連携に関する一考察—パンアメリカン日系大会の視座から— | 国際政治207 |
| 市川 智生 | 明治期日本の海港検疫をめぐる政治外交 | 年報政治学2022(2) |
| 兼原 信克 | NSCの創設について—何が変わったのか— | 国際安全保障49(4) |
| 久保田 裕次 | 原敬内閣成立期の対中国外交と新四国借款団—実業借款の包含問題を中心に— | 国際政治205 |

| | | |
|---------|--|--------------|
| 佐竹 知彦 | 日米豪の安全保障協力―「ハブ&スポークス」体制の変容?― | 国際政治206 |
| 佐藤 丙午 | 「武器輸出三原則等」から「防衛装備移転三原則」へ | 国際安全保障49(4) |
| 三百莉 拓志 | 「2+2」の質的变化による日米同盟強化への影響―九〇年代から新「日米防衛協力のための指針」策定まで― | 国際政治206 |
| 篠塚 隆 | 日本とモロッコ―遠いが近い日の出づる国と日の沈む国 | 中東研究545 |
| 徐 宏馨 | 日本の外務省公文書から見た1969年日米共同声明への台湾の記載記録 | 問題と研究51(3) |
| 末木 孝典 | 戦前期「外交通」議員と新外交：望月小太郎の外交論を中心に | 法學研究95(4) |
| 杉之原 真子 | 対米直接投資規制の決定過程からみるエコノミック・ステイトクラフト | 国際政治205 |
| 高岡 正人 | 日本とクウェート―Friends in need are friends indeed | 中東研究544 |
| 高見澤 將林 | 平和安全法制の制定がもたらしたもの―その背景、プロセス・特色と今後の課題― | 国際安全保障49(4) |
| 武内 進一 | アフリカの平和に向けた日本の政策と実践 | 国際問題707 |
| 竹林 克将 | 高木八尺の戦前と戦後―アメリカを通してデモクラシーを見る― | 国際関係論研究37 |
| 田嶋 信雄 | 日本の枢軸同盟政策と対ソ政策―「反ソ防共」から「連ソ容共」へ― | 国際政治206 |
| 靄岡 聡史 | 1896年の日独通商航海条約を巡る日独関係 | 年報政治学2022(2) |
| 徳地 秀士 | 米中対立の中の「台湾有事」―日本の対応について― | 国際安全保障50(2) |
| 中島 琢磨 | 原子力潜水艦の日本寄港問題―核兵器技術の発展と同盟管理のジレンマ― | 国際政治206 |
| 平川 幸子 | 安倍外交の検証―ASEANと台湾への接近を中心に | 問題と研究51(1) |
| 福岡 万里子 | 日本の主権者は誰なのか：幕末駐日外交官の日本認識と外交1858～1862 | 年報政治学2022(2) |
| 福島 啓之 | 日米同盟の歴史的推移と理論的構図―パワーと脅威の均衡と日本の同盟政策― | 国際政治206 |
| 藤田 吾郎 | 「芦田書簡」の再検討―有事駐留構想と警察改革の連関を中心に― | 国際政治207 |
| 増田 弘 | 石橋湛山内閣の成立と米国政府の対応 | 法學研究95(2) |
| 宮杉 浩泰 | 島内志剛日記にみる対ソ通信情報活動 | インテリジェンス22 |
| ロメロ イサミ | 日本とキューバ革命―一九五九年のゲバラ使節団― | 国際政治207 |

【アジア・中東・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニア関係】

| | | |
|--------|---|-------------|
| 青木 健太 | アフガニスタン・中国関係の変遷と展望―ターリバーン台頭後の地域情勢への影響 | 中東研究544 |
| 青木 健太 | イラン・ロシア関係の展開―イランの「ルック・イースト」政策に着目して | 中東研究546 |
| 青山 弘之 | トルコのシリア侵略の「尖兵」としてのクルド民族主義組織PYD | 中東研究545 |
| 青山 弘之 | シリアにおける米国の軍事介入と部隊駐留の変遷(2011～2021年) | 国際情勢92 |
| 飯田 将史 | 中国の対米政策―国際秩序の変革と核心的利益の確保を目指して― | 国際安全保障50(2) |
| 五十嵐 隆幸 | 米中対立と台湾―大國間競争の狭間に立つ「小国」のパワーと選択― | 国際安全保障50(2) |
| 石井 一也 | 『人新世』における脱成長論―ガンディーの経済論を中心として | 平和研究58 |
| 石川 禎浩 | 中国共産党100年目の歴史決議 | 国際問題705 |
| 磯崎 敦仁 | 2021年・金与正の談話外交 | 国際情勢92 |
| 出岡 直也 | チャベス政権支持増減の要因としてのマクロ経済と再分配政策―世界資本主義の中のラテンアメリカ政治への含意の視角から― | 国際政治207 |
| 井上 実佳 | 「アフリカによるアフリカ問題の解決」再考―国際平和活動をめぐって― | 国際安全保障50(1) |
| 今井 宏平 | アイデンティティから読み解くトルコ外交 | 国際政治207 |
| 今井 宏平 | トルコの西洋化の現在地―公正発展党政権期の米国およびEUとの関係 | 中東研究545 |
| 上杉 勇司 | インド太平洋地域の平和活動―平和構築に対する地域大國の影響力の考察― | 国際安全保障50(1) |
| 梅村 卓 | 朝鮮戦争における中国の宣伝と対米・対日表象 | インテリジェンス22 |
| 浦部 浩之 | ラテンアメリカにおけるポストネオリベラリズム期の地域統合―その歴史的文脈と新たな統合の試み― | 国際政治207 |
| 及川 淳子 | 中国「デジタル・レーニン主義」の思想的背景：「社会治理」と「安全観」を中心に | 国際問題705 |
| 大串 和雄 | ラテンアメリカの移行期正義の特徴―多様な移行期正義像に向けて― | 国際政治207 |
| 大澤 傑 | ニカラグアにおける個人化への過程―内政・国際関係／短期・長期的要因分析― | 国際政治207 |
| 大庭 三枝 | アジアの信頼醸成 | 国際安全保障50(3) |
| 郭 昕光 | 韓国による原発輸出の隆盛と衰退の分析 | 問題と研究51(1) |

| | | |
|-----------|--|------------------------|
| 河西 陽平 | スターリン、毛沢東と東アジアにおける革命運動の「責任範囲」 | 国際情勢92 |
| 梶谷 懐 | 習近平政権の成長戦略について「国内大循環」と「共同富裕」は両立するか | 国際問題705 |
| 金谷 美紗 | エジプトとアメリカの戦略的關係—軍事援助と民主化支援 | 中東研究544 |
| 金谷 美紗 | 東地中海のガス開発協力とトルコの関係改善外交—エジプトとイスラエルを中心に | 中東研究545 |
| 金谷 美紗 | シリアにおけるイスラエルとロシアの暗黙の協力—ウクライナ戦争の影響を中心に | 中東研究546 |
| 金子 真夕 | トルコとロシア—「敵対的友好」という特異な関係 | 中東研究544 |
| 金子 真夕 | 公正発展党(AKP)政権の20年—指導者エルドアンがトルコにもたらした功罪 | 中東研究545 |
| 金子 真夕 | ウクライナ戦争がトルコに与える影響—トルコにもたらす好機と危機 | 中東研究546 |
| 川島 真 | 中国のウクライナ戦争をめぐる動向と日中関係 | 問題と研究51(3) |
| 菊地 茂雄 | 中国の軍事的脅威に関する認識変化と米軍作戦コンセプトの展開—統合全ドメイン指揮統制(JADC2)を中心に— | 安全保障戦略研究2(2) |
| 岸川 毅 | ラテンアメリカに迎え入れられる中国: 平和的台頭からワクチン外交まで | ラテンアメリカ研究年報42 |
| 北野 尚宏 | 「中国・アフリカ協力フォーラム」をめぐる新たな動き | 国際問題707 |
| 木村 幹 | 新たな段階に入った日韓関係: 固着化する歴史認識をどう打破するか | 問題と研究51(4) |
| 栗田 真広 | インド・パキスタン間における2019年ブルワマ危機の検討 | 安全保障戦略研究2(2) |
| 古賀 慶 | ASEANアーキテクチャにおける「信頼醸成」 | 国際安全保障50(3) |
| 児玉 由佳 | エチオピア内戦: 収束への長い道のり | 国際問題707 |
| 小林 周 | 中東発エコノミック・ステイトクラフトの検証—変化する域内安全保障の中で— | 国際政治205 |
| 小針 進 | 文在寅政権下における「親日フレーム」の政治利用と社会分断 | 国際情勢92 |
| 子安 昭子 | ボルソナーロ政権の挑戦的な外交とイタマラティの対応力 | イペロアメリカ研究86 |
| 近藤 正規 | 人口大国インドとその全方位外交 | 国際問題708 |
| 近藤 百世 | ライースイー政権の課題—政権の特徴と今後の展望 | 中東研究544 |
| 清水 文枝 | 南シナ海をめぐる新たな米比関係 | 国際情勢92 |
| 庄司 智孝 | ASEAN政治安全保障共同体—多国間協力枠組みの発展と課題— | 安全保障戦略研究2(2) |
| 神宮司 寛 | エボラ危機におけるシエラレオネ軍の役割と評価 | 安全保障戦略研究2(2) |
| 鈴木 隆 | 〈中華民族の父〉を目指す習近平: 重点政策と指導スタイルの変化にみる政治発展のゆくえ | 国際問題705 |
| 角南 篤 | 先端技術を巡る覇権国としての中国 | 国際問題705 |
| 関 智英 | 華北青年党と日本—日中戦争時期の対日協力 | 現代中国研究48 |
| 高尾 賢一郎 | GCC情勢における域外諸国の存在—2021年が「良い年」だったのかを振り返りつつ | 中東研究544 |
| 高尾 賢一郎 | カタール外交とトルコ—「同胞団外交」の終局とその後 | 中東研究545 |
| 高尾 賢一郎 | GCCにおける「ロシアの帰還」—サウジアラビアの対ロシア外交の背景と展開 | 中東研究546 |
| 高岡 豊 | シリアと大国—繰り返される「シリアを巡る闘い」 | 中東研究544 |
| 高橋 基樹 | 危機に瀕する世界とアフリカ: TICADの今後のために | 国際問題707 |
| 高橋 雅英 | アルジェリアの対ロシア・対フランス関係—ウクライナ危機でのエネルギー供給国の役割 | 中東研究544 |
| 竹内 舞子 | 新型コロナウイルス感染拡大の影響にみる安保理北朝鮮制裁の課題 | 国連研究23 |
| 玉田 芳史 | COVID-19と国体危機: タイにおける脱民主化をめぐる攻防 | 国際情勢92 |
| 段 瑞聡 | 蒋介石の戦時外交と戦後構想—1941-1971年 | 現代中国96 |
| 趙 新利 | 抗日戦争と朝鮮戦争時期における記憶と映像—中国共産党のプロパガンダ戦略に関する考察 | インテリジェンス22 |
| 張 雲 | 中国の強制的エコノミック・ステイトクラフトの論理—レアアース資源外交を中心に— | 国際政治205 |
| 陳 蒿堯 | 尹錫悦政権による外交政策の布石と北東アジア安全保障情勢の展望 | 問題と研究51(4) |
| 中谷 純江 | 国連と地域機構の安全保障パートナーシップのリアリティ・チェック: スーダンの事例 | 国連研究23 |
| 中戸 祐夫 | 日本の対北朝鮮政策と朝鮮半島の平和—日韓政策協調へのインプリケーション— | 北東アジア地域研究28 |
| 能化 正樹 | ナイルとスエズを軸とした三つの時間 | 中東研究544 |
| 服部 崇、車 競飛 | 中国のエネルギー政策における気候変動規範の受容過程 | グローバル・ガバナンス8 |
| 広瀬 公巳 | インドのナレンドラ・モディ首相のリスク管理 | Keio SFC Journal 21(2) |
| 藤井 元博 | 日中戦争期の華中・華南地域をめぐる中国国民政府の軍事体制—政治工作と軍事作戦の関係を中心に 1938-1941— | 安全保障戦略研究2(2) |

| | | |
|--------|---|----------------|
| 藤井 篤 | 脱植民地化と西側同盟—アルジェリア戦争とフランス・ベルギー関係— | 国際政治206 |
| 堀田 幸裕 | 緊張高まる東アジア—対米牽制で一致する中国と北朝鮮— | 問題と研究51(4) |
| 益尾 知佐子 | 中国とユーラシア諸国との「相互信頼」: 中国的信頼醸成の理想と限界 | 国際安全保障50(3) |
| 舛方 周一郎 | 戦略的パートナーシップを通じたブラジル気候変動対策への中国の関与 | 国際政治207 |
| 増田 雅之 | 「リベラルな国際秩序」と中国—親和性の終焉、優位性の追求— | 安全保障戦略研究2(2) |
| 増永 真 | 同盟関係の変容に直面した二国の戦略とその帰結—北朝鮮と台湾を事例として— | 国際政治205 |
| 松本 武祝 | 太平洋問題調査会 (IPR) における土地利用研究プロジェクトの展開—中国・日本・朝鮮の研究を中心に— | アジア経済63(3) |
| 松本 充豊 | 中国のエコノミック・ステイトクラフトと台湾—「惠台政策」における観光客の送り出しの事例分析— | 国際政治205 |
| 三浦 明子 | インドの華人と中印関係—インドの全国紙が報じてきたチャイニーズ・ニューイヤー— | アジア文化研究所研究年報56 |
| 南 研子 | アマゾン先住民の知恵が人類存続の鍵になる | 平和研究58 |
| 三船 恵美 | 転換期の米中関係をみる眼—関与から戦略的競争へ— | 国際政治206 |
| 宮地 隆廣 | 二一世紀ラテンアメリカの政治研究—民主主義と内政・国際関係— | 国際政治207 |
| 門間 理良 | 台湾による中国人民解放軍の対台湾統合作戦への評価と台湾の国防体制の整備 | 安全保障戦略研究2(2) |
| 山尾 大 | 米国の軍事介入とイラク国家建設の蹉跌 | 国際問題706 |
| 山根 聡 | 2021年のパキスタンにおける対アフガニスタン外交の変化と中国の支援 | 国際情勢92 |
| 吉澤 誠一郎 | 愛国とボイコット—近代中国の地域的文脈と対日関係 | 現代中国96 |
| 吉野 文雄 | ASEAN逸脱国をめぐる | 国際情勢92 |
| 渡辺 紫乃 | 「一帯一路」構想の現在 | 国際問題705 |

【アメリカ・ヨーロッパ関係】

| | | |
|--------------|--|--------------|
| 池本 大輔 | ブレグジット後の世界でイギリスとEUはどこまで協調するか | 日本EU学会年報42 |
| 石田 淳 | 武力による現状の変更: ロシアによるウクライナ侵攻における対立の構図 | 国際問題709 |
| 伊藤 一頼 | ロシアに対する経済制裁と国際法 | 国際問題710 |
| 上原 良子 | 潜水艦危機後のフランスのインド太平洋戦略 | 国際情勢92 |
| 大西 楠 テア | 連邦国家における邦(ラント)の外交権 | 年報政治学2022(2) |
| 長 有紀枝 | ボスニア・ヘルツェゴヴィナの平和構築再考—デイトン和平合意25年後の教訓— | 国際安全保障50(1) |
| 尾崎 久仁子 | ウクライナにおけるコア・クライム処罰の可能性 | 国際問題710 |
| 粕谷 真司 | 「共通外交・安全保障政策」構想に対するサッチャー政権の反応、1990年 | 国際情勢92 |
| 片岡 貞治 | フランスとサヘル危機 | 国際問題707 |
| 金子 寿太郎 | グリーン再生下の欧州金融統合—次世代EU債は経済通貨同盟完成の触媒となるか? | 日本EU学会年報42 |
| 神江 沙蘭 | ブレグジットとEU金融市場政策の再形成 | 日本EU学会年報42 |
| 雲 和広 | ロシアの人口減少と外国人労働の受容: ロシアからみた移民政策 | 国際問題708 |
| 黒田 友哉 | フランスの原子力外交と欧州共通エネルギー政策の模索: 濃縮ウラン生産施設計画を中心に(1965-1974年) | 専修法学論集145 |
| 小泉 悠 | 米中対立とロシア—安全保障面における「問題としての中国」と「パートナーとしての中国」— | 国際安全保障50(2) |
| 小林 正英 | ポスト・ブレグジットのEU安全保障 | 日本EU学会年報42 |
| 酒井 啓亘 | 進行中の武力紛争と国際司法裁判所: ロシア・ウクライナ紛争にみる国際司法裁判の役割と限界 | 国際問題710 |
| 下斗米 伸夫 | ウクライナ侵攻再考 | 国際問題709 |
| ミランダ・A・シュラーズ | ウクライナにおけるロシアの戦争: エネルギー・食料安全保障および気候変動への影響 | 国際問題709 |
| 巢山 祐子 | ドイツ・メルケル政権のエネルギー政策合意形成過程分析—グローバル化での民主政権の国家運営— | グローバル・ガバナンス8 |
| 高橋 雅英 | ロシアの民間軍事会社「ワグネル」の中東・アフリカ進出—フランスとロシアの協調・競合関係 | 中東研究546 |
| 高原 秀介 | 異色の共和党政治家・ハーバート・C・フーヴァーの実像を求めて | 国際政治205 |
| 高原 明生 | ウクライナ危機と米中対立 | 国際問題709 |
| 武田 健 | イギリス離脱後のEU加盟国間関係のゆくえ—対立の構図と力関係 | 日本EU学会年報42 |
| 田畑 伸一郎 | 経済制裁とロシア | 国際問題709 |
| 中野 実 | EUに移行する権限の制定過程における加盟国の影響—EASAの新たな飛行時間制限(FTL)導入時のイギリスを事例に | 日本EU学会年報42 |

| | | |
|---------|---|--------------|
| 中村 寛 | アラブ・イスラエル関係正常化を推進したアメリカ外交の目的—対中国デカップリングと21世紀型の戦争— | 一神教学際研究17 |
| 中村 優介 | フランス問題をめぐるイギリス外交、1943～1944年 | 国際情勢92 |
| 西村 真彦 | 安保改正に向けた米国の決定 | 年報政治学2022(1) |
| 長谷 直哉 | 制裁下のロシア—「新たな現実」と中東へのアプローチ | 中東研究546 |
| 服部 倫卓 | ロシアとウクライナの10年貿易戦争 | ロシア・東欧研究51 |
| 浜 由樹子 | ウクライナ侵攻のイデオロギー—5つの構成要素とその背景— | ロシア・東欧研究51 |
| 東 大作 | アメリカはなぜ失敗したのか:アフガニスタンのケースから | 国際問題706 |
| 廣瀬 陽子 | ロシアの対アフリカ政策 | 国際問題707 |
| 廣瀬 陽子 | ロシアの「レッドライン」と2021年の対ウクライナ関連の動き | 国際情勢92 |
| 福島 康仁 | 米国における2つの宇宙軍創設—創設の経緯・意図と立ち上げ状況の評価— | 安全保障戦略研究2(2) |
| 藤原 範子 | The European Green Deal: Opportunities, challenges and implications for the EU and beyond | 日本EU学会年報42 |
| 前嶋 和弘 | バイデン政権と民主主義:選挙改革をめぐる対立 | 国際情勢92 |
| 松里 公孝 | 露ウ戦争におけるロシアの目的—政権打倒、征服、そして領土整理へ— | ロシア・東欧研究51 |
| 三宅 康之 | 第四共和制フランス政府の中国承認外交(1949-1950) | 国際学研究11(1) |
| ミラー 枝里香 | 一九七三年石油危機におけるイギリスの二面的石油政策—アメリカ、フランスと産油国のはざままで— | 国際政治207 |
| 森 聡 | 米国の対中戦略論議 —軍事的競争アプローチの新局面— | 国際安全保障50(2) |
| 矢口 啓朗 | 一八三〇年代の四国同盟—ロシアの対イギリス政策の視点から— | 国際政治206 |
| 山口 優人 | グローバルな「対テロ戦争」の友敵構造と正戦論—オバマ政権のドローンによる標的殺害を事例に— | 国際安全保障50(3) |
| 山田 哲也 | 国際法からみた「一方的分離独立」と「併合」:ウクライナ東部・南部4州の法的地位 | 国際問題710 |
| 李 優大 | ソ連の環カスピ海地域に対する地理認識—北部イラン石油利権をめぐる1920年代の国際関係を事例に— | ロシア・東欧研究51 |
| 和仁 健太郎 | ロシアによるウクライナ軍事侵攻の合法性と国際社会の対応 | 国際問題710 |